TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★☆☆ ふつう 808語

A Fairy Story

ようせいのお話

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ すがたが見えなくなるまほうのぼうしを、きょじんにとられてしまったようせいたち。なき悲しむようせいを見た、山のワシは……。

Some fairies once lived in a dark glen in a pine forest.

They were real fairies, many of them not higher than a pin.

Their greatest treasure was a magic cap which had been in the fairy family for many generations.

The most wonderful thing about the cap was that it fitted exactly any one who wore it.

When one fairy put it on, he and all the others became invisible.

A stupid race of giants lived among the mountains near them. They wanted the fairy cap more than anything else in the world.

One warm day when the elves were away from home, a giant came into the glen. He was seeking just such a cool place for his afternoon nap.

He was so large and the glen so small that when he lay down he almost filled the valley.

The music of a fairy brook soon lulled him to sleep.

Perhaps you have heard how a giant snores, and how his breath comes in great puffs.

The giant was snoring and puffing when the fairies came towards home.

They heard the strange sound and thought a great storm was brewing.

“There has never been such a wind in the glen,” said the fairy queen.

“We will not go down into it. We must seek shelter for to-night on this hillside.”

Just then they came to the giant’s ear.

“Here is a fine cavern,” the queen said, and she stopped and waved her wand.

A fairy hastened forward to carry the cap to a safe place in the cave, for that was always their first care.

Just then the giant awoke.

He raised his great head.

Oh, how miserable the fairies were!

They wept and moaned until even the dull ear of the giant heard them.

It was a sound like the tolling of tiny silver bells.

He listened and understood what the wee voice of the prisoner in his ear was saying.

He was the wisest and most kind-hearted of all the giants.

He helped the little creature gently out into his hand, and looked at him in wonder.

He had never before seen a fairy.

In vain the brave little fellow tried to conceal the precious cap.

The giant saw the wonderful star and knew at once that he had the treasure cap of the elves.

He set the fairy carefully upon the ground, and shouted for joy as he found that the cap exactly fitted his own great head.

The poor fairies could no longer see him, but they heard a sound like thunder, as he hurried over the stones towards his home.

They were now afraid to move about while the sun shone.

They crept under leaves and into shells and cried bitterly.

By sundown every plant in the glen was wet with their tears.

The sharp eyes of the eagle on the mountain top saw them and a great pity filled his heart.

“I must help the fairies,” he said, “otherwise I should not be worthy to be called the ‘king of birds’.”

He went directly to the home of the giants and demanded the cap, but they refused to give it up.



All that an eagle could do, he did, but as the giants wore the invisible cap he could not see them. He could only hear their great voices.

He knew however that the giants were proud of their great size and strength, and liked, above all things, to be seen.

He was sure that they would not wear the cap in battle, and he did not lose hope.

One day they carefully placed it under a large stone on the mountain side below them.

The keen eye of the eagle was watching.

He flew fearlessly to the spot as soon as the giants had left it.

He lifted the stone in his great talons, and was soon flying away with the cap to the fairy glen.

The giants saw him, and knew at once what he was doing.

They began a fierce attack upon him.

The air was filled with flying arrows and sharp rocks. Drops of blood fell on the mountain side, and many feathers fluttered down, but the brave eagle was soon out of their reach.

He did not stop until the cap was safe in the fairy queen's lap.

There was great rejoicing among the fairies that day.

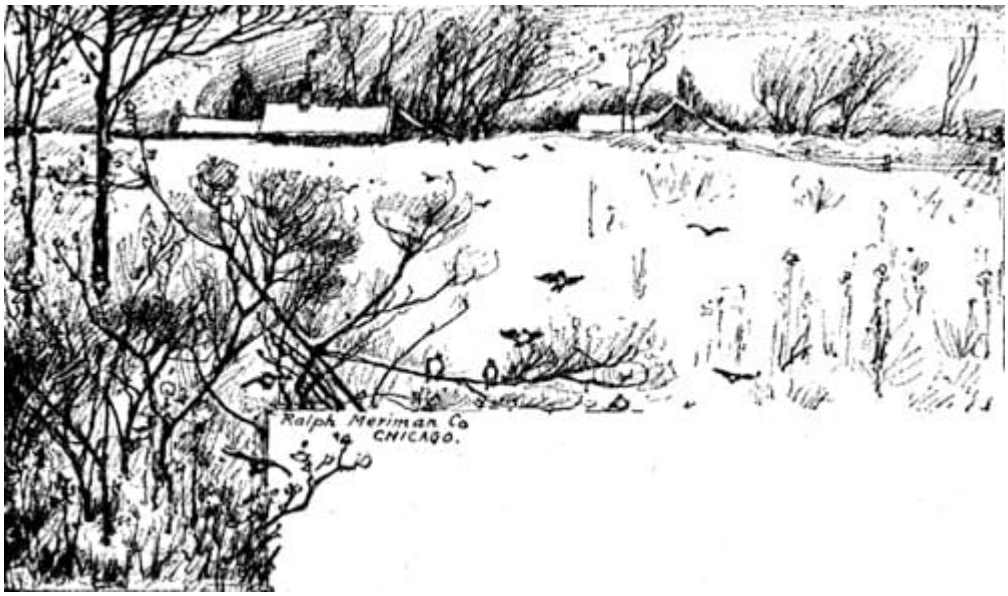
They had a feast in the eagle's honor, and healed his wounds with fairy magic.

On the mountain side, wherever the blood and feathers fell, there sprang up trees with featherlike leaves and blood-red berries.

All the giants, fairies, plants and animals knew why they grew.

The unselfish love in the eagle's blood could not die, but lived again in the beautiful trees.

But people who did not know how they came there, called them mountain ash trees.


Ralph Meriman Co
CHICAGO.

和訳 ようせいのお話（A Fairy Story）

むかし、マツの森のくらい谷間に、ようせいたちがすんでいました。

本物のようせいで、その多くは、ピンほどの高さもありませんでした。

ようせいたちのいちばんのたからものは、何代も前からようせいの一族につたわる、まほうのぼうしでした。

そのぼうしのいちばんふしぎなところは、だれがかぶっても、ぴったり合うことでした。

ようせいがひとりそれをかぶると、そのようせいも、ほかのみんなも、すがたが見えなくなるのです。

近くの山には、ちえのないきょじんの一族がすんでいました。きょじんたちは、世界の何よりも、ようせいのぼうしをほしがっていました。

ある暑い日、こびとのようせいたちがるすのときに、ひとりのきょじんが谷間にやって来ました。きょじんは、昼ねをするのに、ちょうどそんなすずしい場所をさがしていたのです。

きょじんはとても大きく、谷間はとても小さかったので、きょじんがねころぶと、谷がほとんどいっぱいになりました。

ようせいの小川の音楽を聞いているうちに、きょじんはすぐにねむってしまいました。

きょじんがどんなふうにいびきをかき、どんなに大きな息をはくか、聞いたことがあるかもしれませんね。

ようせいたちが家に向かって帰ってきたとき、きょじんはいびきをかき、ふうふう息をはいていました。

ようせいたちはそのへんな音を聞いて、大あらしが来るのだと思いました。

「谷間に、こんな風がふいたことはありません」とようせいの女王が言いました。

「谷へおりるのはやめましょう。今夜は、このおかのしゃめんで、ひなん場所をさがさなくては。」

ちょうどそのとき、ようせいたちはきょじんの耳のところへ来ました。

「ここに、りっぱなほらあながあるわ」と女王は言って立ち止まり、まほうのつえをふりました。

ひとりのようせいが、ぼうしをほらあなの中の安全な場所へ運ぼうと、急いで前に出ました。それがいつも、ようせいたちがまっさきに気をつけることだったのです。

ちょうどそのとき、きょじんが目をさましました。

きょじんは大きな頭を持ち上げました。

ああ、ようせいたちは、どんなに悲しかったことでしょう！

ようせいたちがあまりになきさけぶので、きょじんのにぶい耳にさえ聞こえました。

それは、小さな銀のすずが鳴るような音でした。

きょじんは耳をすまして、耳の中につかまっている小さなものの声が何と言っているのか、わかりました。

このきょじんは、きょじんの中でいちばんかしこく、いちばん心のやさしいきょじんでした。

きょじんは小さな生き物をそっと手の上に出してやり、ふしぎそうにながめました。

きょじんはそれまで、ようせいを見たことがなかったのです。

いさましい小さなようせいは、大切なぼうしをかくそうとしましたが、むだでした。

きょじんはふしぎな星を見て、すぐに、こびとのようせいたちのたからもののぼうしだとわかりました。

きょじんはようせいをそっと地面におろし、ぼうしが自分の大きな頭にもぴったり合うのを知って、よろこびのさけび声を上げました。

かわいそうなようせいたちには、もうきょじんのすがたが見えませんでした。でも、きょじんが石の上を家へ急いでいくとき、かみなりのような音が聞こえました。

ようせいたちは、日がてっているあいだ、こわくて動き回れなくなりました。

葉の下や貝がらの中にもぐりこんで、はげしくなきました。

日がしずむころには、谷間のどの草も、ようせいたちのなみだでぬれていました。

山のてっぺんのワシは、するどい目でようせいたちを見て、とてもかわいそうに思いました。

「ようせいたちを助けなくては」とワシは言いました。「そうでなければ、『鳥の王』とよばれるねうちがない。」

ワシはまっすぐきょじんたちの家へ行って、ぼうしをかえせと言いましたが、きょじんたちはことわりました。

ワシはできるかぎりのことをしましたが、きょじんたちがすがたの見えなくなるぼうしをかぶっていたので、すがたが見えませんでした。聞こえるのは、きょじんたちの大きな声だけでした。

けれどもワシは、きょじんたちが自分の大きな体と力をじまんしていて、何よりも人に見られるのがすきなことを知っていました。

たたかいのときには、きっとぼうしをかぶらないだろうと思って、ワシはのぞみをすてませんでした。

ある日、きょじんたちはぼうしを、自分たちの下の山のしゃめんにある大きな石の下に、だいじにしまいました。

ワシのするどい目が見ていました。

きょじんたちがそこをはなれるとすぐ、ワシはこわがらずにその場所へとんでいきました。

ワシは大きなつめで石を持ち上げ、まもなくぼうしをもって、ようせいの谷間へととんでいきました。

きょじんたちはワシを見て、すぐに何をしているのかわかりました。

きょじんたちは、ワシにはげしくせめかかりました。

空には、とんでくる矢やとがった岩がいっぱいでした。血のしずくが山のしゃめんに落ち、たくさんの羽がひらひらとまい落ちましたが、いさましいワシはまもなく、とどかない所まで行ってしまいました。

ワシは、ぼうしがようせいの女王のひざの上にぶじにとどくまで、止まりませんでした。

その日、ようせいたちは大よろこびしました。

ようせいたちはワシのためにおいわいのごちそうを用意し、ようせいのまほうでワシのきずをなおしてあげました。

山のしゃめんの、血と羽が落ちた所にはどこでも、羽のような葉と、血のように赤い実をつけた木が生えてきました。

きょじんも、ようせいも、草も、動物も、みんな、その木がなぜ生えたのかを知っていました。

ワシの血の中の、自分をすててみんなを思う心は死ぬことがなく、美しい木の中に生きかえったのです。

けれども、その木がどうしてそこに生えたのかを知らない人間は、その木をナナカマドとよびました。

たんご と クイズ ようせいのお話

fairies ようせい	**cap** ぼうし	**giants** きょじん
ear 耳	**wand** まほうのつえ	**eagle** ワシ
feathers 羽	**berries** 木の実	

Q1 **ようせいたちが「りっぱなほらあな」だと思った所は？**

① きょじんの耳　② きょじんのくつ　③ 木のあな

Q2 **ワシがきょじんたちからぼうしを取りもどせたのはなぜ？**

① きょじんたちがねむっていたから　② きょじんがかえしてくれたから

③ きょじんたちがぼうしを石の下にしまったから

Q3 **ワシの血と羽が落ちた所には、何が生えた？**

① バラの花　② 羽のような葉と赤い実の木　③ 青い草

こたえ

Q1 ① ようせいたちはきょじんの耳のところへ来て、それをほらあなだと思ったのです。

Q2 ③ きょじんたちはぼうしを大きな石の下にしまいました。ワシはそれを見ていて、石を持ち上げてぼうしを持ち去りました。

Q3 ② 羽のような葉と、血のように赤い実をつけた木が生えてきました。それがナナカマドです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1895 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。